

神の願い

加藤 享

【聖書】ルカによる福音書16章1～9節

イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』

そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』

主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。

【序】難しい主イエスの言葉

シンガポールでは、人口の75%を占める中国人にとって、今年の**春節**（正月元旦）は2月19日でした。**お年玉袋**と**みかん2個**を、大人でもやりとりします。私が滞在中にもらったお年玉袋には、「家が**金**と**宝石**で一杯になり、幸福と財産が満ちますように」という歌が印刷されていました。

そういえば、我が家の子どもの一人が札幌の小学校を卒業した時のことです。クラスの子どもたちがそれぞれの夢を書いたプリントを持ち帰りました。「**札束**を敷き詰めて、その上で寝てみたい」「思う存分に**お金**を使ってみよう」その子たちも50才に近い年齢になっています。今どうしていることでしょうか。他人事ではありません。私たち後期高齢者にとっても、どのように最晩年を過ごすか、先立つのはお金です。お金の大事さを覚えます。皆さんは如何ですか。

このような私たちに対して神さまは、ルカ福音書16章の「**不正な管理人のたとえ**」から、理解しにくい不思議な言葉をお示しになりました。聖書の注解書に

よりますと、実に解釈の難しい箇所だと言われています。皆さんは分級でどのように読み合いましたか？主イエスは、ここで何を私たちに教えようとされているのでしょうか。私なりに考えてみました。

[1] 仲間を作ろう

都で暮す地主から田舎の農場を任された**管理人**が、不正を理由に**クビ**にされそうになりました。このような場合、大抵の人は**現金**を出来る限りかき集めて、遠くの国に逃亡するでしょう。でもお金はやがてなくなってしまうのです。

先週学んだ 15 章の「**放蕩息子の話**」。彼は父が死なないのに**財産分け**を求めました。多分広い農地を分けてもらったのでしょう。彼はそれを現金に換えて遠い町に出て行き、好き放題に遊び暮しました。友達が大勢集まって来ました。しかしやがて**金を使い果たすと**誰も寄り付かなくなり、豚飼いに身を落しましたが、食べるに事欠く惨めさ。自分の愚かな罪を痛感して、親の許に帰って来た話でした。

その前の週は、12 章の「**愚かな金持ち**」のたとえでした。この金持ちは非常に**働き者**でした。大豊作に恵まれても凶作に備えて、大きな倉を建てて収穫物を全部蓄えました。「さあ、**ひと休み**しよう。食べたり飲んだり楽しもう」しかし神さまはおっしゃいました。「**愚かな者よ**。今夜お前の命は取り上げられる。蓄えた物は誰のものになるのか」**私たちの命**は財産から生ずるものではなく、神さまから**貸し与えられているものだ**という教えでした。

ルカ福音書は、主イエスのこのような教えを積み重ねた上で、主イエスが語られた「**不正な管理人**」のたとえを記したのです。この男は金をかき集めて遠くの国で逃亡生活を送ろうとはしませんでした。**金が頼りにはならないことを知っていた**のです。かといって百姓生活をする体力がありません。乞食生活は屈辱的です。彼は知恵を絞って考えました。「そうだ、自分を大事な仲間として家に迎えてくれる**友達を作ろう**」そこで小作人を一人一人呼び出して、主人から借りのある**証文**を確認し始めたのです。

この証文とは、多分農民が地主に差し出す**小作料の契約書**ではないでしょうか。日本も 70 年前戦争に負けるまでは、農村の大部分が地主と小作農家から成り立っていました。地主は自分も農業をしながら、自分の農地の一部を**貧しい農民**に貸し、小作料の契約書を交わして農地一反当たり米何俵とか、油何樽とかを、自分の倉に納めさせていました。**大地主**になると自分は農業せずに**都会**

暮らしをして、現地には**管理人**を置いて小作料を集め、現金に代えて送金させていました。

このような農業形態は、占領軍の民主化政策によって改革され、不在地主の農地は小作農の所有となり、農家は皆**自作農**になったのです。私の父も農家の長男でしたが、東京で暮すようになりましたので、戦後の**農地改革**で小作に貸していた土地は皆、取り上げられました。

【2】主人がほめた

今日の聖書に出て来る管理人も、都会暮らしをする大地主に代わって、現地で小作人に働かせて小作料を集めては、それを売って主人に送金する仕事を任されて居たのでしょう。そして**中間手数料**として、自分の報酬以上の誤魔化しをしていたのでしょう。

しかし彼は、金をかき集めて遠くの国で逃亡生活を送ろうとはしませんでした。金はやがてなくなるもので、頼りにはならないことを知っていたのです。かといって百姓生活をする体力がありません。乞食生活は屈辱的です。彼は知恵を絞って考えました。「そうだ、自分を**大事な仲間**として家に迎えてくれる**友達を作ろう**」

でも**どうすれば**友達を作れるのでしょうか。大勢の小作人を使っている、そのような身分の**上下関係のつき合い**は、管理人という地位を失えばたちどころに消えて、赤の他人になってしまいます。彼は知恵を絞って考えました。そして貧しい**農民たちが一番喜ぶ**のは、**小作料を安くすること**だと気付いたのです。そこで小作人を一人一人呼び出して、小作料の契約書を確認し始めました。

そして彼は契約書に記されている小作料の数字を小さい数字に、彼の目の前で書き直させたのです。これは**法律違反の行為**です。実務は管理人が一切取り仕切っていたとしても、地主の名義で取り交わした小作料の契約書です。勝手に数字を書き換えるのは**背任罪**。日本では懲役5年以下、罰金50万円以下の刑罰に処せられるのだそうです。しかし小作料を大きくまけてもらえた農民たちは大喜びして、彼に感謝したばかりか、主人に対しても大変感謝したに違いありません。

主人は小作人たちから感謝され、良い地主だと評判が高まった結果をみて、管理人の抜け目のない**知恵に感心しました**。しかも管理人と小作人の間には、

一緒に証文を勝手に書き直したことで連帯感が生れて、単なる付き合い以上に緊密になっています。このように小作人たちに支持されている彼を、主人はあっさりとクビに出来なくなったのではないのでしょうか。管理人のこの**抜け目のないやり方**に「敵ながらあっぱれ」と褒めざるをえなかったのでしょうか。

〔3〕友達を作りなさい

良くない動機だったとしても、この不正な管理人が、**貧しい農民を助けて友達を作ろう**とした行為は、間違っていなかったのです。だから主イエスもおっしゃいました。「**不正にまみれた富で友達を作りなさい。**」しかしこのお言葉は**どぎつい**ですね。

口語訳では「**不正の富を用いてでも**」でした。**この世の富**は、**人を神から遠ざける機会**になるので、「**不正な金**」と言われています。そこで或る英訳聖書では *worldly wealth* (この世の富) と訳されています。「**不正**」と「**この世**」とは、ほぼ同じ意味なのだという解釈なのです。

ところが新共同訳聖書は「不正の富」をわざわざ「不正にまみれた富」と訳し変えました。これは私たちが生きている世界が、神の御心に反する**不正不義に満ちた世界**であり、富が世の不正不義に用いられているという**恐れ**を、明確に表わそうとしたからでしょう。

後にパウロが弟子のテモテに当てた手紙でこのように忠告しています。「なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、**世を去るときは何も持って行くことができないから**です。食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。」「**金持ちになろうとする者は**、誘惑、罠、無分別で有害な**さまざまの欲望**に陥ります。その欲望が、人を**滅亡と破滅**に陥れます。金銭の欲は、すべての悪の根です。金銭を追い求めるうちに信仰から迷い出て、さまざまのひどい苦しみに突き刺された者もいます。」(Iテモテ 6: 7~10) **金銭が悪の根**なのではなく、**金銭欲が悪の根**なのです。そして金銭欲が、富を**不正にまみれた富**にしているのです。

しかし主のそのお言葉には、先があります。「**そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる**」——「金がなくなったとき」とはこの世を去る時、「**死んだ後**で」ということでしょう。ルカ 16 章の後半には、与えられた富を**自分のことにしか使わないで**一生を送った金持ちが、死ん

でから**陰府**でひどい苦しみにあう話が記されています。しかし、不正を働いた管理人でも、生きていた時に**貧しい人を助けて友達を作った**ということで、**永遠の住まいに迎え入れてもらえる**のだと、主イエスは約束されたのでした。

【結】 永遠の住まいの入り口

この管理人は不正に不正を重ねました。しかし我が身を守るためという動機からでしたが、とにかく**貧しい人たちを助けて友達を作ろう**としたのです。そして貧しい人たちに守ってもらいながら、**共に生きていこう**としたのです。そのためには、**自己本位を捨てなければなりません**。自分は管理人だったなどという自尊心を捨てなければなりません。自分を愛することと同じ**愛をもって、その友と共に生きよう**としなければなりません。

こうして不正な管理人自身も**変えられていく**のです。互いに支え合って生きていく**人間**にされていくのです。そして永遠の住まいに迎え入れてもらえる者になるのではないのでしょうか。ですから「**友達を作ること、永遠の住まいの入り口なのだ**」と、主イエスは弟子たちに教えられたのでした。

人が亡くなると、「**天国で会いましょう**」と呼びかけて手を合わせます。でも不正な富を用いてでも、互いに支え合い、仕え合って、**共に生きていく友達を作らなければ**、天国へは行けないのではないのでしょうか。島根県のどかな田舎から大都会に出て来た中学1年生を悪に引き込んで、暴力を振るって服従させ、切り殺してしまうような少年たちを見るにつけても、「**友達を作りなさい**」とお命じになる**主のお言葉の大切さ**を、深く受けとめなければと思います。

祈ります。 神さま、不正に不正を重ねる人でしたが、自分が生きていくためには**友達が必要だ**と気が付きました。そして貧し人を助けました。その人たちに助けてもらいながら、一緒に生きていこうとしました。神さま、貴方は私たちを、**互いに助け合って生きていく人間**としてお創りになったのですね。不正に不正を重ねる男を見限らずに、友達と共に生きる者に変えて下さった貴方の慈愛に感謝します。この私をも、自己本位を捨てて、どんな人とも支え合って生きていく者にしてください。そして**永遠の住い**に迎え入れて下さい。ご自分の命を捨ててまで、私を愛して下さい。主イエスさま。私の内に共に居て、お導き下さいますように。貴方のお名前によって、天の父なる神さまにお祈りいたします。 アーメン